

## マーケット概況（2019年6月）

6月の債券相場は、海外貿易摩擦に対する懸念から堅調地合いを引き継ぎ、10年354回債の取引は-0.100%で始まると、その後は超長期ゾーン主導でフラットニングが進行し、40年12回債の利回りは2016年7月以来となる0.335%まで低下した。その後は、13日に実施された30年債入札がテール87銭と不調な結果に終わったことで、一転して超長期ゾーン中心に売り込まれる展開となったが、19日にドラギECB総裁が追加緩和に言及したことや、米国FOMC後の金利見通しの引き下げによる欧米金利の低下を受けて、スティーピング基調も一服となった。しかし、20日の日銀金融政策決定会合において、黒田総裁が長期金利の変動幅を厳格にとらえる必要はない旨の発言をしたことが伝わると債券相場は再び上昇基調を強め、翌21日には債券先物が史上最高値となる154円13銭まで上昇し、10年354回債も2016年7月以来の高値となる-0.195%まで買い進まれた。その後はG20を控えて一時的に調整される場面も見られたが、債券市場は底堅く推移し、10年354回債は-0.165%で月内の取引を終えた。

### <短国市場>

3Mは月を通して店頭需要が乏しく-0.1%台前半で推移した。7日の3M837回債入札では、最高落札利回りが-0.13%台と前回債から上昇した。一方、1Yから6Mにかけては、欧米市場で利下げ期待が高まるにつれ国内債全体が買い込まれるなか、金利低下した。19日の1Y839回債入札は、最高落札利回り-0.1851%と堅調な結果となり、その後のセカンダリー市場では一時-0.250%に低下した。しかし引き続き3Mの需要は乏しく21日の3M840回債入札は-0.12%台、28日の3MTDB841回債入札では-0.10%台と2017年9月以来の水準まで金利上昇し、最終的にセカンダリー市場では-0.108%で取引を終えた。

### <一般債市場>

新発10年政保債は国債金利の低下に伴い2年7ヵ月ぶりに下限利率0.005%が設定された。10年地方債の先行起債銘柄は前月比同水準の国債カーブ+15.0bpと流通実勢に比べタイトな条件で決定した。一方、後発の東京都、愛知県は国債金利のマイナス幅拡大を受け、ともに下限利率が設定された。既発債はスプレッドが全般的に拡大傾向となったものの、需給に大きな変化は見られなかった。社債では、武田薬品工業をはじめ、電力債や金融債の起債額が膨らみ1兆4,851億円が発行された。金利環境の変化により年限10年超でも絶対値方式で決定する銘柄も見られ、高利率で起債されたヒューリックや楽天は当初の予定額から増額した。ハイブリッド債も相対的に利回りが高いことから人気化し、セカンダリーではスプレッドがタイト化する銘柄も見られた。

### ◎ 主要債券月間四本値 ◎

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#354	-0.100(3日)	-0.195(21日)	-0.095(3日)	-0.165(28日)
#353	-0.110(3日)	-0.200(21日)	-0.110(3日)	-0.175(28日)
#344	-0.195(4日)	-0.280(21日)	-0.195(4日)	-0.260(28日)
#139(5Y)	-0.200(3日)	-0.290(21日)	-0.200(3日)	-0.260(28日)
#168(20Y)	0.295(3日)	0.145(21日)	0.295(3日)	0.220(28日)
#836TDB(6M)	-0.170(6日)	-0.205(24日)	-0.160(18日)	-0.179(28日)
#835-#841TDB(3M)	-0.158(5日)	-0.158(5日)	-0.106(28日)	-0.108(28日)